

第二期 第八十四号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2023. 07. 10 定有堂書店 発行

もう一つの定有堂論

人間を育てることに無関心な国の行く末は
青春時代といえ、あの本しかない
本を作る側から (4)

なんとでも言うてくれ日記

汽水のほとりから (28)

『雨はこれから』を読む

未完の全集のことなど

鳥取あれこれ その八十三

八代日記 (三十九)

物語を愛していたはずの人々は

リメイク

本棚義勇軍

…… 編集後記

奈良 敏行

岩田 直樹

木元 健二

村瀬 謙介

鳥居 貴彦

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメラリア



もう一つの定有堂論

奈良 敏行

(定有堂 主人)

本屋でない人生なんて (3)

六月二十五日に鳥取県立図書館でフォーラムがあった。自分の本屋のことで、語ることはもう何も無いと思っていたが、齋藤明彦さんの「定有堂の検証」という言葉に導かれ、結局「記憶の整理」というテーマで語った。一方、語られなかった、もう一つのテーマもあった。

数週間前に、三砂慶明さんが『目的なき人生を生きる』を入り口にするといい、と進言してくれた。ここ二年ほどこだわり続けていた本だ。しかしここから入ってどう出口へ進めるのか、道筋が見えなかった。

石橋毅史さんが送ってくれた「本屋な日々」103号は、定有堂のことを取り上げてくれた。「最後の『推し本』として、この『目的なき人生を生きる』を拾い上げてくれていた。

石橋さんは定有堂の個性は「本屋の観念性」なのではな

いかという、なるほど三砂さんが言いたかったのもそういうことだったのかと腑に落ちた。

今回のフォーラムの大きな収穫は、石橋さんと三砂さんの対話を聞くことができたことだった。会場、懇親会、その後定有堂に移動し、ここで夜ふけまで二人の対話に耳を傾けた。「三砂さんと話しているといつも時を忘れる。なぜだろう?」という、石橋さんは「三砂さんは問いを立てるのがうまい、立て続けに問いかけてやまない」という。なるほどそうだったのか、とはじめて合点がいった。恐るべき人だ。いつも日常性に裂け目をつくりつづける人だ。

石橋さんは、この「本屋の観念性」という気づきを、『音信不通』の「本屋の『このもの性』」という一文に、発見していた。読み返してみると「観念を日常性として生きよう、というのが久しく定有堂のテーマ」と言い切っていた。十年ごとに個性を変えてみようというのが日頃の本屋論だったのだが、五十年目の入り口がここに読み取れる。わたしは文末を次のように結んでいる。

《わかりにくい本屋話になったが、生きる力は「秩序」の中ではなく「逸脱」の中でこそ発揮されるという結論だ。そして本は人を「偶有性」（個体性）の肯定へと誘うものだと考える。そこに「小さな一冊の衝撃」がある。》
「なぜだかわからないがこうしてしまう」、このことを、

わたしはオブセッション（執着）と、言い習わしてきた。欲望（無意識）のことだ。本がもたらす小さな一冊の衝撃、この「わからなさ」が、本屋の店頭で本と出合うことによつて、この問いの解明の、小さな入り口を発見する。これは「衝撃」だと思う。

石橋さんは外側からそんな本屋体験を端正な言葉で語ってくれる。

《書物という言葉（あるいは絵、写真）を集積したものを空間で埋め尽くしていながら、言葉にできない感慨、目に見えない観念がわきあがってくる》

定有堂の最終ラウンドは、「読書と思索」がそのテーマであることを、暗示していた。本はたくさん読まなくていい。目的が明らかならば、知識を増やしスキルを向上していくために、本はどんどん読んでいけばいい。しかし読書と目的を切り離すと、本はどんどん読み重ねていけばいいというものでもない。ここから「思索」が始まる。どんな読んでもいけば解決するような本を棚に並べるだけでなく、「思索」へと縮小、縮減する読書を構想してみる。入り口は「わからなくなる本」だろうか。「欲望は対象をもたない」という言葉をキーワードに、ドウルーズのコーナーを作ってみた。店内に消尽点できた。

本屋の中で自分の「欲望」に向き合える。未知への関

2023.06.27

山内志朗『目的なき人生を生きる』角川新書 2018

石橋毅史『本屋な日々』103号 トランスビュー 2023

6月25日（日）



人間を育てることに無関心な国の行く末は

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授）

（「読む会」選書人）

よくもまあ、こんな能天気なことを！教育関係雑誌に載った文部科学大臣の発言に接しての感想である。

私はここ数年、静かな憤りを抱き続けている。教育現場のブラックぶりを飽きもせずに指摘するマスコミ、それに対して有効な（面倒な調整が必要で金のかかる）施策を実行しない文科省と関連省庁、選挙の票にならないからか知らんぷりを決め込む政治家に対してだ。

私は毎晩、スマホでニュースをチェックするのを習慣としている。教育現場が過酷であることを強調するニュースが湧き出てくる。教員採用試験の倍率が下がり続けているのは、「教職Ⅱブラック」というマスコミ報道が一つの要因なのかもしれない。そんなことをつらつら考えていたとき、他県の知人からこんな話を聞いた。

成績優秀な何人もの学生が出願直前になって「教員採用試験を受けない」と言ってきた。教員を目指して三年余も熱心に勉強してきたにもかかわらずだ。理由を尋ねると、「ネットを見てみると、教員のブラックな生活に耐えられないのではないかと不安になってきた」とか

「親から、あんなにきつい仕事はやめておけ、としつこく言われた」とか「残業しても手当てが出ない仕事より、福利厚生のしっかりした職業の方がいい」等々。とても残念なのは、彼ら／彼女らは教員の仕事になったわけではなく、労働環境に絶望していることだ。ホワイトな職業生活が送れるならば、教員になろうとするはずだ。ところで、教職調整額と教職員定数について理解しなければ、教育現場が置かれた状況は語れない。

公立学校には「教職調整額」という不思議な制度がある（以下、公立義務教育学校に限定）。マスコミがおざなりに言及するので、少しは有名になったのではないか。これに手を付けなければ労働環境は是正されないのだが、マスコミの論調は総じてなぜか及び腰だ。

半世紀以上前の一九六六年に実施された文部省勤務状況調査の結果、当時の超勤は月平均八時間だった。それに見合う月額四％の相当分を、各都道府県が給与に加算することになった（公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法―略称は給特法―第三条）。

この四％によって、時間外および休日勤務手当は支給しなくてもよいことになった。校長が時間外勤務を命じることでできるのは下記四項目に限られる。①生徒の実習 ②学校行事、③教職員会議、④非常災害等やむを得ない場

合。それ以外の超勤はボランティアというわけだ

給特法からは部活動は除外される。教育関係者でない人が必ずや驚くのは、部活動は、学習指導要領（法的拘束力あり）に記載される教育活動には位置づけられていないことだ。「部活動の位置づけ」問題は半世紀以上も先延ばしされてきた。文科省は働き方改革と抱き合わせにして「部活動の地域移行」に着手したが、各教育委員会、各学校に丸投げしているのが実態だ（先日、現場の嘆きを聞いた）。マスコミがほとんど取り上げないのは教職員定数である。複雑な数式に基づき決定され、素人は容易に理解できない。しかもここ数年は関連法が頻繁に改訂されている。国は教職員の給与などの三分の一を負担している。例えば、義務教育費国庫負担金はおよそ一兆五千億円（令和四年度）に上り、文科省予算（一般会計）の三割弱になる。

教職調整額と教職員定数の問題は、二〇〇〇年代の小泉構造改革（改悪）による新自由主義的規制緩和のはるか以前から、大量の非正規雇用の常態化と絡み合ってきた。

かつて教員採用試験の合格率が確保されてきたのは、教員志望者たちを大量にプールして、そこから非正規雇用として安い賃金で現場に供給してきたからだ。まるで『資本論』の世界だ。さまざまな教育課題が山積み（スクラップ・アンド・ビルドならぬビルド・アンド・ビルドの繰り返し）

されてきたが、教職員定数は一向に増えない。定額働かせ放題（サブスクリプション）の中で、急激な少子化と「ブラック教職」一大キャンペーンによって教員志望者は激減していく。非正規雇用の予備軍は枯渇する。

ある政令指定都市の小学校で働く知人によると、育休代金は百人待ちで、各校が探すように市教委は指示を出しているとのこと。結局、しわ寄せは現場に来る。従来の業務に加え、欠員分の業務をこなさなければならず、現場はさらに疲弊していく。若者がこんな仕事を選ぶはずはない。

それなのに、文科大臣が今後の教育行政の方向性として、①GIGAスクール構想への支援、②子ども家庭庁と現場との連携、③教員採用選考実施時期の早期化、を挙げるとは、喫緊の課題にわざと気づかぬふりをするのときかと思えない。遅きに失した感のある首相肝いりの「異次元の少子化対策」と同様、為政者（＝選挙で当選させた私たち）は人を育てることに何と無関心なことか。

ゴルディアスの結び目はアレキサンダー大王ですら断ち切れなくなっている。一学年千人近くいる某国立教育養成系大学で、半分しか教職を志望しないとは異常事態ではないのか。このままでは、学校に子どもはいても教員がいない事態が必ず来る。「教育は国家百年の大計」という言葉が、冗談のように聞こえるのは私だけなのか。

青春時代といえ、あの本しかない

木元 健二

(新聞記者)

遠くに暮らす旧友がいる。思い浮かぶ彼の面差しは、歳月を経ても変わらない。それと同じように定有堂は、きょうも開いているような気がしている。かつて暮らし、なじんだ鳥取を離れ、もう15年余になる。

新聞記者になり30年ほどになるが、連載記事をまとめた本を一冊だけ残した。ほかならぬ鳥取勤務時代のこと。もちろん自費出版である。

書名を『わたしの鳥取』という。多士済々の、陰影に富む半生をたどった。60人それぞれの方について、原稿用紙3枚余りの字数で記した。1年半ほど続け、最終回にご登場願ったのは、ほかならぬ奈良敏行さん。紙面を開いた友人から「真打ち登場だね」と言われたものである。

〈鳥取駅から久松山に向かい、若桜橋のたもと辺りに、その書店はある。定有堂。開店28年目。きょうも「本の虫」たちが心の羽をひろげ、やってくる。「本屋の青空」とい

う自らがつくった言葉を、店主は語る。書棚の前で時を忘れ、遠くに思いをはせ、無限にひろがるような気分のことだ。高揚感の中、自分が再生の大地にたたずむような……。どうすれば、訪れる人々にそんな境地を抱かせる空間を築けるのか、追い求めてきた…… (2008年3月12日)

こんな書き出しだった。「本屋の青空」という、奈良さんならではの表現に、今も感じ入っている。

勤め先の新聞社では、文化部で幾年か働いた。連載小説の編集や、直木賞、芥川賞作家の取材といった文芸分野のほか、出版社事情などを担当した。週刊誌の編集部では読書欄の担当デスクもした。だから、ふれてきた書籍の点数はそこそこかもしれない。でも仕事の必要にかられて読む本は、なかなか心に染みてこないものだった。

ノンフィクション作家の後藤正治氏に聞いたのだが、かつて氏の担当編集者だった人は「飯を食うように本を読む人だった」という。才気に富んだ彼は、駆け出し作家だった後藤氏に新境地を開かせる働きをし、自身は独立して直木賞作家になった。

今回の原稿に寄せて「青春時代の思い出の本を」と奈良さんが仰せである。後藤氏ら才人の昔話を思い返しつつ、並み以下の私の読書体験を振り返ってみる。青春といえ

ば、若い頃に読み込んだ、あの一冊しかない。

立花隆著『青春漂流』（講談社文庫）。初めて読んだのは1990年。二十歳の夏、通っていた大学の生協で、ふと手に取った。硬派なイメージの立花作品にあって、この作品は11人の若者群像を描いた、人間ドキュメントである。こんなブローグだった。

〈迷いと惑いが青春の特徴であり特権でもある。それだけに、恥も多く、失敗も多い。恥なしの青春、失敗なしの青春など、青春の名に値しない。自分に忠実に、しかも大胆に生きようと思うほど、恥も失敗もより多くなるのが通例である〉（あらゆる失敗の可能性を見えつつ大胆に生きた人こそよく青春を生きたというべきだろう）

心をわしづかみにされ、一気に立ち読みをした。レジで購入をした時、明るかった日が暮れていた記憶がある。

当時私は志望していた大学に入れず、ふてくされていた。友だちもできず、キャンパスに居場所などなかった。思うところあり、当時から新聞記者にはなりたかった。だから、できるだけジャーナリズム関連の本を読もう、と考えていた。その矢先、『青春漂流』に出会ったのだ。

あの時、立花氏の著作に手が伸びたのは、氏が田中金脈

問題を追及した凄腕のノンフィクション作家、というところぐらいは知っていたからである。

彼にして、青春時代の心模様は決して明るいものではなかったと記されていることにひかれた。〈ともかく、迷いと惑いだけは人並み外れて多かった〉と。

むろん大学に落ちたぐらいで落胆する私とは雲泥の差ではある。でも、あの立花隆にして先行きが見えない時代があったことに、妙に救われた気がしたのだ。ひとりぼっちの若者として。

本作は平安時代、空海がせっかく入った京の大学をドロップアウトしたことにふれている。四国で山岳修行者になり、31歳で遣唐使船に乗り込むまでの10年余りを「謎の空白時代」として空海の青春、と位置づけている。敷衍して、若者の来たるべき船出を無謀なものにするか果敢なものにするかは、それぞれの謎の空白時代の蓄積だけが決めるのだ、と結んでいる。

1994年春。どうにか新聞記者になり、振り出しは高松支局だった。空海の出身地と同じ讃岐だったことも重なり、「これから修行だ」と深呼吸したものだった。

茫々30年、出来ない記者の修行は続く。

本を作る側から (4)

村瀬 謙介 (小取舎)

二〇一八年六月に決定した働き方改革関連法により、二〇二四年四月から時間外労働規制が行われる。これにより引き起こされるのが「物流の二〇二四年問題」である。

法定労働時間、時間外労働時間、休憩を合わせた働く時間が一年で三五一六時間だったものが、時間外労働時間を約二〇〇時間削減され、計三三〇〇時間に制限される。これまでモノを運んでいた長距離ドライバーは、荷物を積み下ろし先で長い待ち時間があつたり、荷物を受け取りに行つたは良いが生産待ちがあつたり、運賃自体が安いいため、高速道路を使う際は深夜料金になるまで料金所手前で待つなど、時間外労働時間を多く担保して成り立ってきた面がある。東京から広島まで運んで戻ってくるのに、会社のコスト減の面から下道で走り、一泊二日で帰ってくるという運送業者も普通なくらい過酷な仕事である。運転者の安全健康などを考慮し、これを改善するのがこの法案だ。

ただ、労働時間の上限が規制され、このまま何も対策を講じなければ運送業者の売上は落ち、トラックドライバー

は来年十四万人相当不足するという。生鮮食品を扱うスーパーへの配送の遅延、建築資材が届かない、医療機関へ薬が届かないといった深刻な状況が危惧されている。もちろん、何も対策を講じなければの話である。運送会社は各社知恵を絞って、物流を止めず、加えて社員の健康を守っていくことを実践し始めている。例えば、これまで東京広島間で荷物を運搬をしていた会社は、東京からの荷物を積んだトラックと、広島からの荷物を積んだトラックを大阪で合流させ、荷物を入れ変えずにドライバーだけスイッチし、元来た道を帰っていくということを始めている。ドライバーは東京広島間の往路ではなく、中間の大阪で引き返すことにより、労働時間が短縮され毎日家族の元に帰れると満足しているということだ。

小取舎は鳥取県内の文化を鳥取の方に向けた本を出版している。と同時に地方だけの問題に限らない普遍的な内容のものも多く、県外でも興味のある方や県外に住む鳥取出身の方でも買っていたけりよう amazon を利用している。小取舎は本が出来上がると、書店に直接取り扱ってくださいますと頼んで納品する直販と、今井書店など県内の加盟書店に配本してくれる取次である鳥取県教科図書販売株式

会社（通称教販さん）、そしてamazonの3つの販路を利用している。amazonでの書籍販売には実は二種類あり、出品者からamazonに本を送ってamazonから配送してもらう一般的なパターンと、あくまでも注文がamazonで出来るだけで、発送は出品者がする小口出品サービスがある。前者はamazon側に在庫がなくなつたとしても出品者に通知がなかなかこなかったり、在庫量を指定される。百冊渡しますのとはいかないのである。後者はその点、こちらの在庫がなくならない限り、いくらでも注文があれば受けられ、発送ができるため、小取舎はこちらのシステムをとっている。amazonの箱では届かないが、注文者の方のお名前をつけた小取舎からのお札を入れて発送できるのも利点だ。送るのは日本郵便のレターパックライトである。

ヤマト運輸はクロネコDM便を既に廃止し、ポスト投函型宅配サービスであるネコポスも順次終了する。代わって物流を効率化するために提携したのが日本郵政グループ。長年ライバルであった二社が手を組むというほどの状況になっている。蔦屋書店のカルチュア・コンビニエンス・クラブと紀伊国屋書店、日本出版販売（日販）の三社が新会社設立の協議を始めた。日本での二大取次は日販とトーハ

ンだが、そのトーハンの近藤敏貴社長は、「出版流通は、もはや既存構造では事業が成立しない。市場の縮小に、トラック運転手の労働時間規制を強化する二〇二四年問題が重なり、本を運ぶ費用を賄えない」という。出版社が首都圏に集中し、そこからトーハンは全国に毎日発送し、時間指定で届ける。大変だが、そこに価値があるのも確かだ。

六月二日に岸田首相は二〇二四年問題に対して「物流を持続可能なものとするためには荷主企業、物流事業者、消費者が一体となってわが国の物流を支えていくことが不可欠」と言っている通り、消費者の協力・理解も必要である。

二〇二〇年で宅配の数は一二億個だったものが五〇億個と約四倍に増えている。Yahoo!では最短配達以外を選択するとPayPayポイントが付与されたり、amazonでは玄関前に置き配（マンションのオートロックを解除できるシステムもあるらしい）に力を入れ、再配達という配達事業者にとって無駄な時間を減らすことを行っている。

発刊日当日、書店に本や雑誌が並ぶという一見当たり前のことの裏には、多くの方の努力がある。二〇二四年問題とはこれまでが問題だったのであって、これからは「思いやる気持ち」で配送の当たり前が変わっていくだろう。

なんともも言つてくれ日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

うちの五歳児には毎日おどろかされている。最近おどろいたのはごも同士で約束をしてくるようになったことだ。急に「○○くんとにちようびにこうえんいくねん、やくそくしてきた」などと言う。ただ時間の概念がないひとたちが待ち合わせをすることは不可能なのだった。

仕方ないので親同士で連絡を取り合い、動物園に行くことになった。四人の五歳児はキリンやレッサーパンダの横を駆け抜け、柵にしがみついてカメを眺めている。動物園のすみっこ、ハムスターやアヒルの檻のとなりに作られた小さな池。そこらへんの川にいるイシガメだかミドリガメだかをじつとみつめる四人の五歳児。「あ、こどものカメが下にもぐったな」「あのおかあさんガメは家にいるんやな」などと勝手なことを延々としゃべっている。カメは「い

や俺はお母さんじゃない、オスだし」とか余計なことは言わない。黙っておかあさん役を受け入れてくれる。ありがたいカメ。

店にきたおじさんが「古本はどの棚？」という。あーあんまり分けてなくて、と答えると「うん、うわきは聞いてたよ」とニヤツと笑う。なんやそのうわさつてと思ひながらほつておく。うわき通りだと喜ばれるのか。うわさと違つていたらどうなんだ。おじさんは昨日買い取つて来たばかりの無造作に積みつばなしの本の山を熱心にみている。棚にちゃんと並んだ本があるのにそこらはあまり見ようとなない。「こうやつて積み上がつて本の方がなんかありそうつて思つちゃうよね」とまだ値段のついてない本を何冊か買つていく。古本を目当てに来た人はほとんどの場合、棚よりも無造作に積み上がった山の方をみている。「うーん、図録かあ。重たいなあ」といやそうにしながらも全部の本の背表紙を見ずにはいられないらしい。腰をかがめ、首を曲げて一生懸命見る。山を崩し、積まれた本の一番下まで見る。そして本棚に並んだ本はあまり見ずに帰る。

「なんか評判いいですねぇ」とすれ違いざまに自転車に乗つたNさんに声をかけられる。評判でなんですかと聞

くが自転車はもうNさんの職場に向かって進んでいる。朝は誰しも急いでいる。立ち話をしている時間はない。「友だちがいい店って言ってました」と遠くから聞こえてくる。いいことならまあいいか。もつと褒めてくれ、誰か知らんけど。

トークイベントというものに久しぶりに参加した。本当に久しぶり。大勢の人が会場に座っていて、インターネットの向こうでも同じくらいの人たちが聞いているらしい。周縁と中心のお話。「ここが世界の中心だ」と演者が言った。どんな周縁にもそれぞれの物語があり、周縁に住む人からすればそこが中心だ。自分の暮らしが自分の中心だ。「そこは端っこだよ」と誰かに言われてハイそうですかと暮らしている。端っこと言われつつ端っこを中心として暮らしている。

「メダカのよだれってあわなんやで」と息子他突然言い出した。うーん、そうなんかな。そう言われたらそうかも。「くちからあわがでるやろ。だからよだれはあわなんや。メダカはな」と何度もう。まあそうかもなあ。メダカはぷかぷかとエサを食べている。たぶん何も考えていない。

三月の終わり、鳥取へいった。本屋でぼんやりする。ぼんやりしているのだが焦っている。全部を見ておかないといけないような気がする。見てどうする。いつの間にか閉店の時間になっていた。近くの喫茶店へ誘われ、四年前にもおなじ喫茶店に来たことを思い出す。あの時はどの質問にもまともに答えられなかった。今はまともに答えられなかったということはわかつている。今もまともに答えられないだろうということもわかつている。わかつているからちよつとラクだ。喫茶店を出て三人で川を渡った。川べりには桜がこれでもかと咲きほこっていた。「こっちから見るとね、水面に桜がうつつてきれいですよ」と本屋の店主はいろんな角度から桜を見る。その後ろからぼくもぼんやりと桜を見る。満開の桜はだまって静かに咲いている。どうみられようと桜は何も思っていない。誰になんと言われようと静かに咲いている。

汽水のほとりから (28)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

いつからか、テレビはNHKしか観なくなつた。若い時は民放の番組もよく観ていたのだが、年のせいだろうか。もっとも今の若い人はテレビに余り関心なさそうだから、民放だつて観やしまいが、受信料を徴収するNHKならばなおさらだろう。確かに、NHKは国営放送ではないが、国の意向を反映するイメージがある。が、実は民放の方が出資するスポンサーの意向で不自由に陥る危険性が高い。恐らくそれはSNSのプラットフォームも同じことだろう。むしろNHKのように、普通の人々の出資による公共放送の方が本来コモン・社会的共通資本の発想に適うものだ。

社会的共通資本を唱えた経済学者の宇沢弘文によれば、その概念は自然環境、社会的インフラ、制度資本の三つに分けて考えられるが、そのうち制度資本は社会的共通資本の機能や役割を考える際に重要な意味を持ち、特に医療と

教育が大切とされる。(『社会的共通資本』岩波新書)。
戦後の復興期にNHKに教育チャンネルが創られたのは、それが国民のための公共放送だという認識に由来しよう。
NHK教育テレビは世界初の教育専門チャンネルである。
最近の教育テレビ(今はEテレという)では、積極的に性的マイノリティや障がい者と呼ばれる人たちを番組に登場させ、当事者として語ってもらふことで社会的な差別解消を目指す番組を多数制作している。以前、『バリバラ』という番組で「BLACK IN BURAKU」と題し、現在も人種差別に苦しむ米国の黒人が被差別部落を取材に行くという企画を放映し、部落差別の問題を真正面から扱っていたが、これなどはスポンサーが出資する民放では作るのがなかなか難しいのではないかと思われたものだ。

ところで、その教育テレビで毎週ほぼ欠かさず見る番組の一つに『100分de名著』がある。名著とされる一冊の本を一回25分×四週の100分で紹介するといった内容だが、先日その番組にナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』が登場したので紹介したい。指南役は、ジャーナリストの堤未果。一貫して国家権力の犯罪的体質を告発する著作を世に問う彼女の原点にあるのが、カナダ出身の同じく女性ジャーナリストであるクラインが書いたこの名著である。

書名にいう「ドクトリン」は、新自由主義の規制緩和・

民営化・社会保障削減の三大原則を踏まえたものである。

これに基づく政策を、自然災害やクーデターや戦争などのショックな事件が起きた際、国民が思考停止している隙をねらって、政府が猛スピードでねじ込み、国や国民の大事な資産を合法的に略奪し、政治家やそのお友達企業が大儲けするという手法が「ショック・ドクトリン」である。一九七〇年代後半以降、米国を中心とする西側諸国でこの手法が顕著になるのをクラインは発見し、そう名づけた。

クラインはこの本の序章でこう述べている。「ショック・ドクトリン」というレンズを通すと、過去三五年間の世界の動きもまるで違って見えてくる。この間に世界各地で起きた数々の忌まわしい人権侵害は、とかく非民主的政権による残虐行為だと片づけられてきたが、じつのところその裏には、自由市場の過激な「改革」を導入する環境を整えるために一般大衆を恐怖に陥れようとする巧妙な意図が隠されていた」（『ショック・ドクトリン』岩波書店）。

右で彼女が言う「数々の忌まわしい人権侵害」の中には、中国の天安門事件やソ連崩壊後のロシアの民衆弾圧なども含まれる。20世紀に共產主義国として成立した両国は、世紀末に「ショック・ドクトリン」によって現在のような資本主義国へと変貌するに至ったのである。主導したのは両国の市場で金儲けしようと企んだ米国政府や資本家で、

指導したのは新自由主義のドクトリンを説くシカゴ大学
の経済学者ミルトン・フリードマンとその教え子だった。
- 13 -

当時、新自由主義は新保守主義と称され、フリードマンはノーベル経済学賞を受賞した。その彼と激しく対立し、批判したのがシカゴ大学の同僚であった宇沢弘文である。彼の社会的共通資本の考えは、急速に新自由主義へと傾く歴史の捻転を是正し、人間的な社会を創るにはどうするかという問題を「経済」の語源である「経世済民」の原点に立ち返って考えるという意図で創り出されたものだった。

クラインは、9・11同時多発テロが起きた後で米国の「ショック・ドクトリン」は大胆な進化を遂げたという。テロとの闘いを理由に、人々の監視や他国への軍事介入が民意を得るようになったからだ。それから二十数年、今や「ショック・ドクトリン」のターゲットは世界規模になり、新たなプレイヤーとしてIT企業群が参入してきている。堤未果が日本のデジタル化に警鐘を鳴らすのもそれ故だ。実際、日本政府はコロナ禍の中でデジタル庁を新設した。これもまた「ショック・ドクトリン」ではないかと疑う目を国民は持つ必要がある、という堤の話に耳を傾けたい。

『雨はこれから』を読む

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「ドツ、ドツ、ドツ……」。バーティカルツイン特有の排気音が聞こえてきて、玄関の前で止んだ。

「はい。これ、メールで言ってたヤツ」。W650から降りたH女史が、リュックから紙袋を取り出す。中身は、東本昌平のコミック『雨はこれから』（モーターマガジン社）が9巻。「主人公がSRを大事に乗っていて、これは萩原さんに読ませたい」とメールにはあった。

◇ ◇ ◇
こう見えて（どう見えてんだ？）十六歳からバイク乗りである。

高一の夏、河川敷で同級生の父親のカブを拝借して乗ったのがきっかけで、「ペダルをこがずに前に進める」

感動に、すぐに原付免許、そしてCB50を手に入れた。

高校の校則はゆるく、夏休み前になると、バイク乗りを自己申告した生徒らが一つの教室に集められ、「事故と違反、これをやったら即、停学だからな」「ハーイ、わかってます」。これで終わりだった。

けれども夏休み明けには決まって、「ナナハンで百ギオーバーしてつかまった」などという数々の『武勇伝』を耳にするのだった。

◇ ◇ ◇
H女史のことに少し触れよう。新聞社に新入社員で入って来た彼女は、小柄で細身ながらモトクロスをやっていて、入社早々、台風で道が寸断される中、バイクで本社までフィルムを届けるという大手柄をやったのけた。

学生時代はバイク雑誌で原稿運びのバイトをしていたという。私も愛読していた雑誌「アウトライダー」は、高校で同じ文芸部だった原田宗典がバイクをテーマに短編小説『黄色いドウカと彼女の手』を連載していた。

彼女の人生は、病気の子供と風来坊のダンナを抱えて苦労続きだったが、女手ひとつ、資格を取ってどうにか生きて来た。「でも、人生これで終わり、でいいのか」。そう思って手に入れたのが、W650だという。

彼女から借りた『雨はこれから』を読み始める。

主人公は人生に少々疲れ、テレビ局を五十七歳で辞めた男。廃墟になった山奥のドライブインを改装し、バイク三昧の独り気ままな人生を送ろうとするのだが。

「押しかけ女房」のように通ってくるアラサーの女性ライダー、ダートトラッカーで張り切り過ぎてジコつてしまう珈琲屋の老店主など、毎回さまざまな人間がバイク絡みで彼の人生に割り込んでくる。バイク雑誌「ミスターバイクBG」の連載ならではのストーリー。

東本昌平の描線（とくにバイクや人物）は抜群にうまい。SRのほか、CBの通称「ヨンフォア」、カワサキの「ダブワン」などなど、私の世代には懐かしいバイクが次々登場するのも魅力だが、なにより、煮え切らない主人公の「自問自答する独白」に思わず引き込まれる。

「自由だの、自分らしく生きる、などと」「このいらだちは何なのだ」「六十近くなつて未だになにがやりたいのか、わからないでいる」「若い頃からもがき続け、大詰めに至りて、まだもがいている」。なるほど、その通り。

◇

◇

◇

バイクに乗り続ける熟年ライダーたちを、主人公は「彼らは戦っているのだ」と語る。私はH女史と、彼女には少々大きすぎるW650を思い浮かべた。「人生これで終わり、

でいいのか」。そうだ、彼女は今「戦っている」

四半世紀近く乗り続けたSRを手放してからは、ピアジオの三輪スクーターに乗った以外は、二輪からすつかり遠ざかっている。第一、カミさんが許してくれない。「何をいまさら。事故を起こすだけ。自転車で十分じゃない」

そういうカミさんも若い頃はハスラーを乗り回し、前のダンナとモトクロスのコースに出ていたのだが。

白旗をあげるか、抵抗あるのみか。

◇

◇

◇

「じゃあ、読み終わったら、また連絡くださいね」とH女史はW650にまたがった。

「年なのか仕事をこなすのが遅くなって。まあ、六十五まで仕事して、六十五まではバイクに乘る予定です」

「ちえ、僕はもう六十五になっちゃったよ」

「あ、六十五以上はサイドカーですよ。補助輪(笑)」

それもいいなあ。主人公は「いまさら」というセリフには「悟りに似たあきらめと後悔、そして希望」があるという。そう、「いまさらながら、年甲斐もなく、また始めました」という希望が。

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

6月22日 木曜日 19時から

テキスト 石井幸孝『国鉄―「日本最大の企業」
の栄光と崩壊』(中公新書、2022年)



定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

8月17日 木曜日 19時から

定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)



太極拳教室(会場 定有堂二階・他二カ所) 葉香クラブ

毎週 水曜 十九時半から・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

三段 公認B級指導員

定有堂教室 「読書室ビオトープ」

小説を読む会です 19時半から

7月13日木曜日 第三回テキスト川上未映子 『ヘヴン』

未完の全集のことなど

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

全集…何と魅力的な言葉だろうか。

出版社にとっても大事業であり、時に社運を賭けてまで挑戦する。

麗々しく大家の言葉が並んだ立派なパンフレットが用意され、広告が打たれる。初回配本は上々、予定どおり。しかし…なのである。

日本不思議物語集成 既刊七冊 現代思潮社

昭和四十八年に一巻一万五千円という値段もどうかと思うが、近世以前の日本の物語文学の作品集に、B5判総革天金装という装幀も如何なものかと思う。この価格なら和装本にした方が余程気が利いている。売れ行きが芳しくなかったか、全十一巻を全うできず。

涙香全集 既刊七冊 宝出版

昭和五十四年。五十巻を超える長大な計画だったが、版

元の倒産であえなく沈没。

オスカー・ワイルド全集 既刊四冊 出帆社

昭和五十一年。訳者陣も優れ、装幀も世紀末文学に相応しいものだだったが、版元が倒産。後年、訳者の一人・西村孝次の個人全訳で青土社より五巻本が、更に増補した六巻本が刊行された。祝着。

ホフマン全集 既刊十一冊 創土社

昭和四十五年から二十年以上掛けて刊行され続けるも、訳者の逝去により中絶。未刊は評論・書簡・日記・評伝巻だけなので、小説作品部分は尽くしていると言える。既刊分はオンデマンドで入手可能とは言うものの、あの意表を突いたブックデザインの函入本は捨て難い。

ラヴクラフト全集 既刊二冊 創土社

昭和五十年、荒俣宏の単独訳でスタートするも続かず。『暗黒の秘儀』が売れたので行けると考えたのかもしれないが、全集は早過ぎたようだ。果たして、その後の国書刊行会版、創元推理版は無事完結し、重版もされた。

シュオブ小説全集 既刊三冊 南柯書局

五十二年。これも早過ぎたか、造本に凝り過ぎたか。
版元倒産により。

ボレル小説全集 既刊一冊 南柯書局

五十五年。同右。

テオフィル・ゴーチェ小説選集 既刊三冊 森開社

昭和五十一年、一千部限定。十巻を予定していた筈だが、
訳者の健康上の理由か、配本が途切れ、程なく逝去。

妖精文庫 既刊三十一冊 月刊ペン社

昭和五十一年から、荒俣宏の肝入りで、三期に及ぶ長大
なシリーズとなった。各期で装幀が異なるのも御愛嬌。第
一期は無事全巻刊行し終えたが、第二期で一冊、第三期で
三冊が未刊となった。版元も倒産。

ゴンクール日記 既刊六冊 角川書店

昭和二十二年に鎌倉文庫から刊行が始まったものの、倒
産により三冊で途絶。三十四年から版元を替えて、五巻ま
で刊行するも訳者逝去、弟子筋(?)により六巻を刊行し
たが、以後途絶。現在流布している岩波文庫は、同社の豪
華本(抄訳)をベースにしたものである。どうも、我が国

では完本の出版は望めそうにない。

メリメ全集 既刊六冊 河出書房新社

七巻の書簡・日記巻が未刊。六巻が昭和五十四年だから、
既に四十年が経過。訳者はおろか、社内にも当時を知る編
集者はいまい。

アンドレ・ブルトン集成 既刊六冊 人文書院

こちらも五十三年から四十年以上経過。十二巻の内、半
分しか出なかった。需要はあると思うが、陣容の立て直し
や経費を考えると、まあ難しかりう。

ピエール・ルイス作品集 既刊三冊 奢瀨都館

昭和五十九年から、生田耕作個人全訳で開始されるも、
凝り性で遅筆は有名。『生田耕作コレクション』(白水社)
も五冊で中絶している。訳者も亡くなって久しい。

鳥取あれこれ その八十三

内田 克彦（地域研究家）

（承前）

名前が挙がった女性たちの中で、「田中かね」については、『追悼 田中かね 一女教師の生涯』が一九七七年に刊行されており、その中の「公的職歴一覧表」に、「鳥取市連合婦人会理事 昭 三」と載るが、それ以上の記述はない。また、『鳥取県史 近代 第四卷 社会篇』にも、国際連盟協会鳥取支部に関して、次のように唯一名前が出て来るものの、肝心な『県史』の婦人会運動の項には名前が出て来ない。

同協会にはまた東京・京都に次いで婦人部も設けられ、婦人会運動で有名な田中力ネらが活躍した。

『県史』で当該項目を担当・執筆した生田清には、『日本海新聞』に一九六六年二月九日から翌年四月一九日まで五二回にわたって連載された『鳥取県女性百年史』があ

り、「大正・昭和初期編」の中で「鳥取県の『おはなはん』幅広い活動をした田中かね女史」として、次のように紹介している。

大正十三年に結成され、昭和十六年までつづいた「全国小学校連合女教員会」は、女教員の地位向上を基本スローガンの一つにかかげ、教員組合の先駆的役割りを果たした。「略」本県では、この結成全国大会に出席し、翌年から昭和十六年まで、鳥取市女教員会会長の任にあった田中かね女史の功労が大きい。

続いて「戦時編」でも「鳥取大地震の産物 田中かねの託児所 公立保育所第一号」として紹介している。

地震後、乳幼児をかかえていた親は、復興作業にさしかえて困っていた。当時久松校から市立高女の家庭寮の舎監に転じていた田中かねは、寮生の不在の間を利用して、寮を託児所に開放することを提案し学校の同意を得た。こうして翌年三月までに、彼女と多くの市立高女生の愛情によって、六カ月分の乳児をふくめて三十人の乳幼児が保育されたのであ

る。〔略〕

市も〔略〕十九年度から五カ所に保育所を開設する〔略〕田中かねのはじめた託児所に名付けられたみたら保育園はその第一号である。

さらに、注目すべき記述が、次のとおり続く。

こうなると保母も今までのような間に合わせですますわけにはいかなくなる。そこで今度は県が十九年度から、やはり市立高女の寮を使って保育婦養成所を開設した。これも全国最初の試みであり、現在の保育専門学校の前身である。

因みに、ここで「これも」とあるのは、一つ前の回で、「これを見て他県も「社会保健委員の」養成事業をはじめることになるのである。」と書いているように、鳥取県がいわゆる農村保健婦養成の先鞭をつけたことを言っているのである。

同様な記述は、毎日新聞社『鳥取百年』（一九六八年刊）にもあり、調べてみると、残念なことに保育婦養成所は「全国最初」ではなかった。田中かねは、『鳥取県大百科事典』にも、横山喜美恵の記述により紹介されている。なお、歌

誌『青炎』主宰の田中大治郎は彼女の長男である。

『追悼』に載る本人の日記に、次の記述があるように、鳥取大火によってすべての資料が失われたのであろう。

懐かしき祖宗の家、幾十年手をかけた植込の樹々、思
出を語る家財の山を午后十一時半に灰燼に帰した。

さて、全関西の活動に戻る。一九二七（昭和二年）の十一月号の『婦人』は、「第九回全関西婦人連合大会号」であり、これまでの大阪朝日新聞社の主催が、この回から全関西婦人連合会の主催となった。鳥取連合婦人会から、「明年の御大典記念として婦人会にふさはしき事業は如何」「関西における婦人会一致団結して大阪市に『関西婦人会館』設置のこと」「本会において迷信打破の大運動を起しては如何」の三議案を提案するほか、「出席代表者名簿」に、鳥取県代表として、入江うた（前回も出席）、西村ゆき、田寺とし、木本君子、岡村つか、本城規矩枝、中尾順子（前回も出席）、国広文子（前回も出席）、瀧川留子、梅田時尾、太田壽賀の名が挙がっている。

（以下、続く）

二〇二三 六 二四

八代日記

(三十九)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

五月十四日

お呼ばれして青山月見ル君思フにてライブ。Boyd が主催で湯浅湾と共演という至極光栄な企画でした。うちの力不足でうちの分の予約が少なくて集客が心配だったが、結構当日券でいらしてくださったのもあったのだろうか、お客さんもいっぱいでしたと安心。ひと安心だったけどお客さんが多いのには慣れず緊張した。

リハーサル時から湯浅湾のサウンドがとてとても素晴らしく、やっぱりうちらはまだまだだと痛感。音の分離とミックスの加減が未熟なのだろうか。たいへん勉強させていただく。

先に出番の僕は緊張しすぎてメンバーの誰もがろくな喋りもしない(できない)まま、曲間の沈黙に気まずいかなと思いつつ、なんとか無事に演奏を終了。あたたかい拍手をいただき、励まされた。

出番を終えて次の湯浅湾の本番を2階席から観ている時に、某作家氏を客席に発見。笑顔で湯浅湾を観ていらつしや

る…。僕はファンなので舞い上がる。我々の演奏も聴いてくれたのだろうか…。チャンスがあったらお話できるかな…。

しかしそのことも忘れるくらいのかっこいい演奏に聴き入って、ビールを飲んで酔っ払ってしまった。終演後、物販で湯浅湾のレコードを買ったり、来てくれていた友人と喋ったりして、お客さんめだいぶ捌けた後の会場をふらふらしていたら前方よりその作家氏が。

「ケバブジョンソンって最初のバンドでドラムしてました、ファンです。聴いていただけましたか。」とかつまらない挨拶をしてしまった。「思いのほか良かった」という言葉をいただき、頭真っ白で話も膨らませられず、「握手してください」などと言って、握手していただく。力強かった。僕も力強く握ってしまったかもしれない。もっと話したいこといっぱいあったはずだろう自分。日頃の鍛錬＝準備が足りていない。

そんなこんなどで買った湯浅湾のレコードもどこかに置き忘れてしまい、ギターの佐藤くんの家に帰宅。おつかれさまでした。

五月三十一日 六月一日

八代氷室祭。今年は二万個くらい雪餅の配送をしたけ

れど、トレーニングしていなかったら腰も体力もたなかっただろうと思う。始めたときは氷室祭のことは考えていなかったけれど助かった。トレーニングありがとう。

妙見宮では地元の組合の方々の雪餅作りが復活したこともあり、売上では苦戦したが祭りも盛況だったようでありだった。

日付をまたいで25時くらいまで店舗の外で販売して、片付けを済ませて職場を出たのが26時頃。帰り道で力が抜けて何度も寝そうになる。

気がついたらなんだかだっ広いところに居て、自分の車は停まっている。もしや道の真ん中で寝てしまったのかと思い、たいそう焦って左側に車を寄せようと考えたがエンジンにはかかっていない。まさか道路でエンジン切ったのか俺はと思いいながらもひとまず左側に車を寄せよう、その前にエンジンかけなきゃいやその前にハザードランプつけた方がいいのかかと思いいながらあたりに目を凝らしていたら、どうも駐車場にいるようだった。ひとまず安心したがどうやってここまで来たのか全く記憶がない。頭を落ち着かせて周りを見てみると、緑川パーキングエリアの駐車場らしい。

家までの帰り道、宮原サーブエリアを過ぎてからはここまで車を停められるところはなく、以前もあまりの眠さ

にいつの間にかこの駐車場で寝ていたことがあった。ありがとう緑川パーキングエリア。二度も救われたが、この食事はあまりおいしくない。

パーキングで仮眠して帰宅。風呂だけ入ってすぐ出勤。八代でホテルを探しとくべきだった。

次男が三歳になった。

六月某日

大友克洋全集23巻と24巻を長崎書店に受け取りに行く。高い。第一期配本コンプリート特典のTシャツのためにがんばる。

六月某日

音信不通に寄稿されている方々の文章は回を重ねることに研ぎ澄まされ静謐な力強さを増しているように感じるが自分の文章は全く上手くなる気配がない。ドラムが全くうまくならないのと同じ原因な気がする。

数年前に定有堂を尋ねた際、奈良さんが、定有堂の本は全て返品可能であることを笑顔で語られていたことがずっと忘れられなかったのだが、きれいさっぱり店内が片付いてシュツとたたまれたのではないかと勝手に想像し、勝手にあの話に納得している。

物語を愛していたはずの人々は

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

定有堂で、小説の読書会が始まった。

五月の課題図書になった『星の王子さま』は、読もうと思っていて、後回しになっていた。六月の課題図書の『密やかな結晶』は舞台版を観る前に、原作として以前読んでいたものだった。レジュメ作成者の熱の入りよう、一つの表現を読み取り、裏の意図まで読み込む深さに、定有堂の奈良さんも「小説って、こういう読者に支えられているんですね」と感嘆の一言。「こんな風に読みますか？」と聞かれ、私は答えに窮した。

私はどう物語を読んできただろうか。

物語といったときに浮かぶのは、小説の本である。絵本を読み聞かせられ、自ら読むようになり、それが児童向けの本へと広がっていく。どんな場所でも本を開けば、続きを自分のペースで文字から想像していくことができる。

映像作品による物語も身近にある。テレビをつけてアニ

メ、スマホでドラマ、映画館で映画。場面場面の絵が見せる世界に否応なく投げ込まれるのが、映像作品の物語だろう。あえて、「映像になつていない部分」の意味まで考えるのも、楽しみ方の一つだろう。

子どもの時を振り返ると、私は物語作りが好きな子どもだった。何者にでもなれる作家になるのだと周りに言いふらしていたし、通わされていた作文教室は、私一人だけ小説教室になるほど、想像するままに書き進めていた。

中学に入ってハマってしまったのが、宝塚歌劇だった。女性だけで構成される劇団として知られるが、彼らが得意とするのも、小説を原作とする舞台だった。おかげさまで中学二年生の時にスタンダードの『赤と黒』を「原作だから」と読み始め、海外の古典小説を読みあさるようになった。「私なら、この作品のここを舞台にするのに」「舞台装置はあれがいい」というファンとしては奇怪な視点で観劇し、いつか宝塚で脚本を書くとう決意していた。

そうやって進学した大学では、ミュージカルサークルに入って、脚本を書いてみたりしたもの、正直どれもただけなものだった。意味深長なセリフを言ってみるものの、軽い。人間の人生辛いことは山のようにあるのだが、温室育ちの私の手にかかると、しょうもないことで悲劇の展開を迎えてしまう悪い意味での荒唐無稽さ。自分が経

驗していないドラマを描けなかった。さらに、物語の中でも同情してしまう私は、人が傷つくようなショッキングな場面を描くことすら、ためらわれた。

次第に、物語によって傷つく人がいる現実には、フィクションの暴力性を感じ始めた。ジェンダー、人種、新しい倫理観から、物語作品が見直され始め、果たして、自分ではない何者かの人生、自らが当事者ではない物語など語れるのだろうか、大人になって臆病になった。

今年、是枝裕和監督・坂元裕二脚本の『怪物』がカンヌ国際映画祭で、LGBTQを扱った作品に与えられるクィア・パルム賞を受賞した。会見で日本のLGBTQを扱った映画についての質問があり、監督の発言が話題になった。

『確かにそんなに多くはないかな。ただこの作品はそれ(LGBTQ)に特化した作品ではありません。成長過程で誰にも起こりうる、言葉にしにくい葛藤や感情を抱えた子どもの話と思って作りました』(2023年5月29日朝日新聞)

この発言を受け、マイノリティの葛藤を普遍的なものにする映画の暴力性に対する批判もされている。賛否両論の反応のようだ。ということまでは知りつつ、「悪い意味で」話題になっている印象を持ちながら、映画館へ向かった。

作品の視点はそれぞれの人物の正義を見守り、突き放し、

それ故に物語に違和感を感じたり、傷ついたりする人も25
いるかもしれない。が、最後には主人公達の未来が物語の外側に開かれるように、私は感じた。日本屈指の作家達が語る物語は、「物語を経ても、世界は変わっていない」という終着点のように思える。変わらない世界を生きていく力強さに、一縷の希望を託す映画だったのではないか。

自分の人生の重みで潰されそうな時、目の前の他者の人生に圧倒される時、フィクションを夢想する力は弱まっていく。誰かを傷つけたくもなく、自分も傷つきたくない。それでも、誰かを傷つけてしまうことも、物語ることの一要素だと受け入れるしかない。自分でない誰かに、ここではないどこかに、助けを借りずとも心を傾けられた頃の自分が懐かしいし、今の自分に必要な「自由」だから。

そんなふうに書いているうちに、私は『密やかな結晶』のヒロインである小説家に思いを馳せる。作中、彼女もあることがきっかけで小説を書けなくなってしまう。果たして、それは「忘れた」だけなのか。彼女も傷つくことに臆病なのか。あるいは「自由」を捨てたのか。

想像力よ、いつか私のことを思い出して。君を迎えに行
く準備を今度こそは忘れないようにするから。

リメイク

あきの素生

(くうねるめがね)



カレーの季節がやってきた。年がら年中食べてはいるが、夏になると「カレー熱」が高まる。カレーはつつい鍋いっぱいにつけてしまう。ので、自然とリメイクする機会が増える。といっても、カレーの最強最終形態はカレーうどんだと思っているので、粉末のかつおだしと水、葱を足し、レンチンした冷凍うどんを入れて食べ切るのが常だ。

カレーに限らず、何でも作りすぎるので、リメイクは欠かせない。リメイクの結果カレーになることも、もちろんある。肉じゃがをコロッケに、みたいな高度なりメイクは手に余るのだが、野菜炒めを焼きそばに、とか、余った餃子の具を卵焼きに入れて、とか、ちよつとした変化で日々食べつないでいる。リメイク、なんていうと、少し大げさかもしれない。

手芸に少しだけ凝っていた時期がある。手作り雑貨の店

や本が身近にあった。売り物を買うことも多かったが、自分で作るってことが楽しかった。毎回悩まされるひとい肩こりをものともせずに、縫ったり編んだりした。

特に好きだったのは、かぎ針編みだ(棒針編みは二センチくらいで音を上げた)。同じモチーフをいくつも作る。目を数えながら、ひと針ひと針編む。手が慣れてくると、ひよいくるひよいくると素早く編み進められるのが気持ちよく、調子に乗ってどんどん編んだ。たまに数え間違えていて、一周編んできたところで気付いたりする。誰かにあげるわけでもない、自分で使うだけだから別に、と一瞬逡巡したあと、意を決して間違えたところまで毛糸をほどき、編み直す。モチーフがたまったら、それをつなぎ合わせて、マフラーや当時流行っていたスヌードもどきを作った。既製品と比べればずいぶん不格好だが、出来上がったうれしさもあり、職場に着て行ったりもした。

手作り雑貨を作る知人に、手芸を習いに行ったこともある。教わったのは、ジーンズのリメイクバッグだ。今でもそうだが、自分にとっては、ジーンズは他の衣服よりも処分しづらい。気に入って買ったという点では変わらなくても、生地自体に、なんというか重みがある。そのまんまだが。物理的な重量が価値を感じさせるのか。いろんなお

店で好きな服を選んで買い始めた学生時代の服は、ただでさえ思い出深く、まだ手元にあるものすらある。リメイクしたかったのは、そんな服のひとつ、凝ったデザインとサイズが理由で履かなくなったが手放せなかった、特別気に入りのジーンズだった。ストレッチのよく効いたローライズの細身のジーンズ。これをリメイクできたらと思い、二つ返事で誘いを受けた。

最初は先生が用意してくださっていた、子どもさんの履けなくなったジーンズやハギレなどを使った。足の部分は切り取って持ち手に加工、ジーンズのポケットがそのままバッグのポケットになるという寸法。小花柄の内布を付けて仕上げ、小ぶりで使いやすいハンドバッグになった。

その後、自分で件のジーンズのリメイクに取り組んだ。内布には、柄が好きで大切にしていたのに首回りがよれてきたTシャツを使うことにした。家のミシンは先生のものとは違って、ジーンズを縫い合わせてある箇所には難なく針を通せるような馬力はないので、そういった部分は布の表面を掬うように手縫いした。

苦心して、こだわりを詰め込んだリメイクバッグは、それはそれは重たいバッグとなった。物理的に。せつかく作ったし、見た目は「好き」しかないのだが、そのあまりの重さに、だんだん持ち歩かなくなり、結局筆筒の肥やしになっ

ていった。布って重いんだな、バッグって軽い方がいいんだな、Tシャツって結構伸びるな、などの学びを得て、私のリメイクブームは去った。

このブームによる学びが役に立ったのは、コロナ禍だった。十年以上の時が経っていた。マスクが無い、どこにも行けない、そんな中で、手作りマスクを作った。表に少し刺繍の入ったハンカチ、裏地に肌あたりがよく生地が伸びるTシャツを使った。お気に入りの柄の、横つちよの真つ白な部分。切り開いていびつな布になった元Tシャツは、いつかまたするかもしれないリメイクのために温存している。



（イラスト・あきの素生）

本棚義勇軍



ドラメリア (座敷わらし)

フォーラムも終わった翌週の金曜日。本棚義勇軍が定有堂に集結した。

発端は三砂慶明さんだった。自宅を改装してリアル「読書室」を作り、そこに定有堂の本棚を置くのだという。最初に「本棚を持ち帰りたいと思っていて」と聞いたときは、せいぜい記念に一台ぐらいかと思っていたのだが、あるとき三砂さんは発行人との会話の途中で「ちょっと、棚を測ってきますね」と巻き尺を手にも奥の間に消えていき、去った後には「売約済」と言わんばかりに寸法と通し番号を記したメモが棚のそこかしこに貼られていた。「あ、この人めちやくちや本気だ」と思わされた瞬間だった。

わたし自身は本棚に特別な思い入れを持たない。職場の本棚は備え付けられた備品にすぎないし、並べられた本たちも己の思想や好みは反映されない。けれど定有堂の本棚は、並べられた本も相まって唯一無二のものになっていてと感ずる。大げさに言えば魂、のようなものがこもっていたように思う。それを受け継ぐということは、あの店の核を引き継ぐようなものかもしれない。

さて、義勇軍。平日の真つ昼間ということもあり、わたしは馳せ参じることがかなわなかったが、集った八名の戦士たちの顔ぶれは様々だったようだ。

縁の深い人たちだった。

搬出後の店内を見ると、自分のコーナーのあった棚も一緒に連れて行ってもらえたようだ。賑やかな飾りを外されて何も持たず佇んでいるように見えたあの棚も、新しい場所で、新しい人生(本棚生)を歩むのだろう。長年過ごした仲間の棚たちとともに。その光景を見に行きたいなと思った。



・編集後記:

・講演の中で、進行に合わせて壁面に紙を貼るという重大ミツションがあり、無事完遂しました。壁が大変かたく、画鋏を刺すのに苦労しました。

ドラメリア(編集長)

・六月二十五日(日)の鳥取県立図書館フォーラム、「定有堂書店「読む会」の展開」が無事終了しました。会場参加83名、オンライン52名、計135名でした。

報告の途中、「淡雪」と「沫雪」の文字張り出しでドラメリア編集長にお世話になりました。話の核心をビジュアル化でき好評でした。

奈良敏行(発行人)